**タイトル（MS明朝18ポイント，太字）**

**2行にわたる場合行間は0に設定**

**英語タイトル（Times New Roman 18p. bold）**

**（本文と同じ言語のタイトルを先に記す）**

**副題は14ポイント，太字，1行に収める**

執筆者 氏 名（勤務先または所属部署）MS明朝12ポイント，中央揃え

共同執筆者氏名は改行して中央揃え（例：〇大学△学部）

**要旨**: 見出しのみ**太字。**執筆者氏名の後に空白行を1行入れ，本文が日本語の場合は日本語（MS明朝10.5ポイント）で300字以内。本文が英語の場合は英語で（Times New Roman 10.5ポイント）で250 words以内。両端を2文字インデントする。「実践報告研究」については200～300字（短め）で，目的・参加者・流れ・結果等を簡略に記す。

**キーワード**：本文と同じ言語で5個以内とし，カンマで区切る。配置は要旨と同じ。見出しのみ**太字**。

**1 大見出し（ＭSPゴシック，11ポイント，太字）**

1.1 小見出し（MS明朝11ポイント）

　大見出しの前は1行空け，フォントはMSPゴシック11 ポイント, **太字**とする。小見出しの前は1行空けず，太字にしない。カテゴリーは小見出しまでとする。大見出し，小見出し共に数字の後は半角スペース。

1.2 本文のフォント

日本語はMS明朝11ポイント，英数字はTimes New Roman 11ポイントを基本とする。（ただし，本文の後の注，引用文献は10.5ポイント）

1.3 括弧について

本文中の括弧については，（　）の中がすべて日本語の場合は全角（　）にする。（　）の中がすべて英数字の場合は半角 ( ) にする。半角 ( ) の前後に半角のスペースをおく。（　）の中に日本語と英数字が混じっている場合は全角（　）にする。

1.4 数字について

　数字は半角とし，Times New Romanにする。

1.5 年号について

　すべて西暦年に統一する。

1.6本文中の句読点

「，（全角）」「。」を使用する。

**２　図表について**

図表は，本文中で必ず言及すること。白黒またはカラーにする。

2.1 表について

　表題（11ポイント）は通し番号をつけ，表の上に左寄せとし（例：表1.　○○），表のあとは1行空ける。

　＊表の中の文字のフォントは本文と揃えるが、文字の大きさは表のサイズに合わせて調整するものとする（ただし11ポイント以下）

表1．参加したHoliday Card Exchange Project のグループの内訳

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 参加国 | 生徒の年齢（才） | 生徒数（名） | 返事到着時期 |
| 台湾 | 11 | 20 | 12月 |
| 台湾（台南） | 13 | 46 | 12月 |
| カナダ | 12-13 | 50 | 1月19日 |
| ベラルーシ | 10-12 | 10 | 12月 |
| スロベニア | 9-13 | 30 | 未着（連絡なし） |

2.2 図について

　図題（11ポイント）は通し番号をつけ，図の下に中央配置（例：図1.　○○）とし，図題の後は1行空ける。

図1．Holiday Card Exchange Projectに参加した振り返り

**３　注**

　本文中の注をつける語の右肩に通し番号をつけ1，文末注とする。注番号は半角英数字を用い，基本的に句読点の前に付ける。

**４　引用と引用文献**

　引用については，以下の例に従う。

(1) 文中の短い引用の場合

・引用する部分は「日本語」または “English” で示し，出典を必ず明記する。

「　引用部分　」(Cohn & Fredrickson, 2009)

・日本語の中に半角の英語や引用符を入れる場合は，前後に半角スペースを入れる。

・途中省略する場合は，（中略）とする。

（例1）

　Cohn & Fredrickson (2009) によれば「ポジティブ感情には喜びや興味，満足や楽しみ，（中略）肯定的感情は含まれない」としている。しかし，また，同時にIsen (2009) は中程度の肯定的感情 (mild positive affect) という用語を幸せな気分 “happy feeling” の意味，つまりポジティブ感情と同様の意味で使用しており

(2) 長い引用の場合

・引用部分が5行以上にわたる場合は，前後に空白行1行を入れ，両端を2文字インデントし，最後に出典を示す。

（例2）

ARCSモデルに基づく検証により、ポジティブ感情を喚起する方策がどのように作用して学生の動機づけやパフォーマンスに影響を与えるのか、に関する仕組みがより明確に示すことが可能になった。

これからの課題は、ブルームのタキソノミー改訂版を参考に、学習の動機づけになる感情について評定できるのか、という問いから初めて、動機づけに関する感情の役割と認知の関係を更に探っていこうと考えている。（白石よしえ，2019）

(3) 引用文献について（書式の詳細は下記の例を参照いただきたい。）

・注の後に1行空けて引用文献（本文中に引用されたもののみ）を載せる。

・フォントは見出しのみMSPゴシック11ポイント，太字（内容はMS明朝またはTimes New Romanで10.5ポイント）。

・英文文献を先に，日本語文献を後に，それぞれアルファベット順に並べる。

**注**

**＊**すでに発表したものや科研費への言及は注の最初に，番号なし，右寄せ，10.5ポイントで記入する。ただし、投稿時には記載しない。

1. 注のリストは，本文の後に1行空け，番号順1に記載する。番号は半角とする。

2. 見出しはMSPゴシック，11ポイント，太字とし，左寄せにする。

3. 内容はMS明朝，またはTimes New Roman，10.5ポイント，太字なしとする。

**引用文献**

Claro, J. (2016). Japanese First-Year Engineering Students’ Motivation to Learn English. *Studies of Human Science*, *12*, 67-105.

Gardner, R.C., & Lambert, W. E. (1972). *Attitudes and Motivation in Second Language Learning*. Rowley, Massachusetts: Newbury House.

Ryan, S. (2008). The ideal L2 selves of Japanese learners of English. Unpublished Ph.D. dissertation, University of Nottingham, UK.

Ryan, S. (2009). Self and Identity in L2 Motivation in Japan: The Ideal L2 Self and Japanese Learners of English. In Z. Dornyei & E. Ushioda (Eds), *Motivation, Language Identity and the L2 Self,* pp.120-143. Bristol: Multilingual Matters.

Taguchi, T., Magid, M., & Papi, M. (2009). The L2 Motivational Self System among Japanese, Chinese and Iranian Learners of English: A Comparative Study. In Dörnyei & Ushioda (Eds.), *Motivation, Language Identity and the L2 Self*, pp.66-97, Multilingual Matters.

Ueki, M., & Takeuchi, O. (2015). Study Abroad and Motivation to Learn a Second Language: Exploring the Possibility of the L2 Motivational Self System. *Language Education & Technology 52*, 1-25.

酒井志延・中西千春・久村研・清田洋一・山内真理・間中和歌江・合田美子・河内山晶子・森永弘司・浅野享三・城一道子 (2010).「大学生の英語学習の意識格差についての研究」『リメディアル教育研究』5 (1), 9-20.

鈴木政浩 (2014).「望ましい英語授業と楽しさの要因の関係－英語授業学研究の視点から－Relationship Between Factors of Preferable Teaching Practice and Enjoyment of Learning English in Classroom」『中部英語教育学会紀要』第43号, 9-144.

松畑熙一 (1991).『英語授業学の展開』大修館書店．